

1. 文化教育学部

I	文化教育学部の教育目的と特徴	・・・	1 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・・・	1 - 5
	分析項目 I 教育活動の状況	・・・	1 - 5
	分析項目 II 教育成果の状況	・・・	1 - 30
III	「質の向上度」の分析	・・・	1 - 36

I 文化教育学部の教育目的と特徴

1. 文化教育学部の教育目的・教育目標

本学部の教育組織は、「学校教育」「国際文化」「人間環境」「美術・工芸」の4課程から構成されている。各課程の教育目的と教育目標は（資料1）の通りである。

資料1 課程別の教育目的・教育目標

学校教育課程	教育目的	社会的、国際的に広い視野と教養を持ち、教科内容、教育方法等について幅広く学び、教育実習の充実・高度化を通して、学校教育現場の諸問題に的確に対応できる教員を育成すること。
	教育目標	(1) 学校教育における様々な問題に積極的に関心を持ち、目標を持って主体的に学習する習慣を身につけている。また、学校教育の諸問題に的確に対応できるように、継続的に自己研鑽に励む意欲と態度を有する。 (2) 高い倫理観と豊かな人間性を育み、学校教員としての責務を自覚して自己の能力を社会に還元する強い志を有し、社会人としての規範に従って行動できる。
国際文化課程	教育目的	文系専門分野に関する幅広い学識を持ち、徹底した外国語教育を通して、豊かな語学力と幅広い国際的視野を備える人材を育成すること。
	教育目標	(1) 環境やジェンダーをはじめとする現代国際社会に共通の諸課題について正確な知識を修得し、専門教育課程で培われる広い視野の下で、自然と社会の持続可能な共存、人間の尊厳に基づく人と人の平和な共生等への道を探求し、その実現に向けて積極的に参画する意欲を有している。 (2) 欧米や日本・アジアについての専門分野の知識を修得し、市民社会の一員としての自覚と責任を持って自律的に行動する能力を有している。また、その専門的知識を積極的に活かして、種々の分野における国際的・地域交流の促進や地域社会の文化的向上・活性化に寄与することができる。 (3) 卒業論文の作成を通じて課題を明確にし、生涯を通しての持続的関心を形成する。
人間環境課程	教育目的	心身の成長と特性、地域の生活と文化及び環境の理論と技術に関する幅広い学識を身に付け、より豊かな生活を実現するための主導的役割を果たすことができる人材を育成すること。
	教育目標	【生活・環境・技術選修】 (1) 多様な文化や価値観を理解し、生活環境の改善、地域社会の創造、あるいは環境の保全といった行動を、社会的規範を守りつつ他者と協調して行うことができる。 (2) 社会的役割を自覚し自己を活かすという視点を持って、継続的、自主的かつ自律的に学習ができる。 (3) 生活環境の改善、地域社会の創造、あるいは環境の保全のための高い倫理観を持ち、卒業後も地域社会等が行う活動に参画していく重要性を理解し、その姿勢を持っている。 【健康福祉・スポーツ選修】 (1) 健康科学の専門的スキルを習得することによって、専門職業人としての高い倫理感、強い責任感、指導力、コミュニケーション力を磨き、探究心を養い、多様な文化と価値観を理解し、これに対応できる力を身につける。 (2) 社会的役割を自覚し自己を活かすという視点を持って、卒業後も継続的、自主的かつ自律的に活動ができる。
美術・	教育目的	美術・工芸分野の理論・実践について学び、あわせて当該分野の教育について考究することを通して、美術教育者若しくは造形作家として、又は企業等において活躍できる人材を育成すること。

工芸課程	教育目標	(1)コミュニケーション手段の一つとしての美術・工芸の重要性を理解し、美術・工芸に関わる活動を社会活動の一つとして行う意欲や態度を有する。 (2)人間の営為の中で、美術の創作行為のもつ独自性、その価値を理解し、美術に対して素直に感応できる態度を、自己の創作活動、教育活動、その他を通して社会のなかに浸透させることのできる資質を有する。また、美術作品の内容や形式が、それを生み出した社会や文化と強く結びついていることを理解し、美術活動を通して常に社会に対する問題意識をもつ態度を有する。 (3)人間には普遍性が存在すると同時に、異なる文化・宗教・人種などによって人間は差異性をも有することと、またそれを認め合うことの重要性を、自己の創作活動や作品鑑賞によってはもちろん、様々な能動的活動および他者との触れ合いの中で知らしめることのできる資質を有する。
------	------	--

これは佐賀大学の第2期中期目標にも掲げられた「21世紀における知的基盤社会を支える豊かな教養と専門性を兼ね備えた市民を育成する」という教育目的を文化教育学部において具現化したものとなっている。

2. 教育カリキュラム

学校教育課程は小学校教諭免許状が取得できるカリキュラムが組まれている。他の3課程は、教養を備えた実践的人材を養成するためのカリキュラムが組まれている。

3. 入学者の状況

主に九州北部出身者からなり、佐賀県出身者 36.1%、福岡県出身者 28.6%である。

4. 組織の構造

組織構成等は次の(資料2)に示されるとおりである。さらに附属組織として附属教育実践総合センター(以下「実践センター」という。)、附属小学校、附属中学校、附属特別支援学校、附属幼稚園がある。

資料2 学部の構成

課程	選修	入学定員／ 編入学定員	収容 定員	学生数	大講座(教員)
学校教育	教育学	90	360	391	教育学・教育心理学
	教育心理学				
	障害児教育				
	教科教育				教科教育
	数学				理数教育
	理科				音楽教育
国際文化	日本・アジア文化	60	240	300	日本・アジア文化
	欧米文化				欧米文化
人間環境	生活・環境・ 技術	60	240	294	地域・生活文化
	健康福祉・ スポーツ				環境基礎
美術・工芸	美術・工芸	30	120	135	美術・工芸
(3年次編入学)		20	40	(50)	
合計		240/20	1000	1120(50)	

()内数字は3年次編入学現員で外数。 学生数は平成27年5月1日現在

5. 想定される関係者とその期待

本学部における関係者（ステークホルダー）、およびその期待に関しては以下の（資料3）に掲げられるものが想定されている。

資料3 想定される関係者とその期待

想定する関係者	関係者の期待
在学生	教育目標・目的に沿った体系的なカリキュラムの提供 学修意欲を増進しうる理解しやすい講義の開講 学びやすい教育環境・空間の整備
卒業生	教育者・社会人として必要な専門知識の提供
佐賀県内の教育機関	教育現場における高い実践能力を備えた人材の育成
地域社会	地域社会の活性化に貢献できる人材の育成
国および地方公共団体	行政分野における汎用的な知識と高い実践能力を持つ人材の育成
国外の学術交流協定校・組織	より実り多き国際交流
本学の教職員	本学部の理念・目標・目的を達成するための各種環境の整備

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 1-1 教育実施体制

(観点に係る状況)

1-1-1 教員組織編成や教育体制の工夫

「教育課程編成・実施の方針」(資料 17)に基づくカリキュラムとその教育を担当する教員編成の整合性を検証し、教育上主要と認める授業科目を原則として専任の教授または准教授が担当するように計画的な配置を行っている。平成 27 年度の主要科目の専任(准)教授による開講は(資料 4)に見られるとおり学部全体では 8 割弱である。主要科目一覧については(別添資料 1)の通りである。

資料 4 平成 27 年度の主要科目の開講状況表

課 程	平成 27 年度
学校教育	175/201 (87.1)
国際文化	74/109 (67.9)
人間環境	57/70 (81.4)
美術工芸	53/78 (67.9)
全 体	355/459 (77.3)

上段：適正配置科目数／主要科目数 下段：上段のパーセント表示

※適正配置科目とは専任(准)教授が担当している主要科目

(出典：文化教育学部資料)

1-1-2 多様な教員の確保の状況とその効果

教員の選考は原則、教員選考規則に則り公募で行っている。

必要に応じて公募書類は英語版も作成している。平成 28 年 3 月現在、文化教育学部には外国籍の教員が 2 人在籍し、外国語教育、異文化交流、留学生指導等において指導力を発揮している。

「佐賀大学男女共同参画宣言」の精神に則り積極的に女性登用を進めている。平成 28 年 3 月現在、20 人の女性教員が在籍しており、平成 26 年度には昭和 24 年 5 月以降の教育学部時代を通じて初めて女性教員が学部長に選出された。女性教員は女子学生のためのキャリア教育、男女共同参画関連事業、セクシャルハラスメント相談窓口等において中核的役割を担っている。

また、プロジェクト等については(資料 5)に示すような任期付き教員を採用して、遂行上必要な専門的業務を担当した。

資料 5 任期付き教員

役職（任期）	前任の役職、資格等	担当プロジェクト等
実践センター准教授 (H24～H27)	小学校教員 (佐賀県との交流人事)	教育実習関連の指導、「教職実践演習」のコーディネーター
実践センター教授 (H22～H25)	元医学部教員 (小児科医)	発達障害・不登校及び子育て支援に関する医学・教育学クロスカリキュラムの開発
実践センター講師 (H22～H25)	臨床心理士	発達障害・不登校及び子育て支援に関する医学・教育学クロスカリキュラムの開発
実践センター講師 (H22～H25)	心理検査の専門家	発達障害・不登校及び子育て支援に関する医学・教育学クロスカリキュラムの開発
欧米文化講座准教授 (H23～H25)	企業人	文化創成コーディネート・プログラム
欧米文化講座准教授 (H23～H25)	研究者	文化創成コーディネート・プログラム

(出典：文化教育学部資料)

1-1-3 入学者選抜の工夫

「入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)」(資料 6) を定め、これに沿って入学者選抜を行っている。この方針では「求める学生像」とともに、入学後の具体的な学習内容を例示し、それを学ぶために必要な能力や高等学校等での準備学習等について具体的に明示している。さらに、「入学者選抜の基本方針」として、入試方法ごとに、その目的、募集対象者、評価方法等を定め、各選抜方法の位置付け、意図を明確に示すとともに、評価対象と評価方法及び入試方法区分の対応を明示した一覧表「文化教育学部で学ぶために必要な能力や適性等とその評価方法」(資料 7) により入学志望者に分かりやすく伝えている。

資料 6 文化教育学部入学者受入れの方針(「求める学生像」(抄) 及び「入学者選抜の基本方針」)

【1】求める学生像

文化教育学部は、学校教育課程、国際文化課程、人間環境課程及び美術・工芸課程により構成し、各々の課程の持つ特質を融合させたカリキュラムを整え、特定の専門知識に偏らない「総合知」を有する人材を育成することを目的とします。各課程の目的と求める学生像は以下の通りです。

■学校教育課程

社会的、国際的に広い視野と教養を持ち、教科内容、教育方法等について幅広く学び、教育実習の充実・高度化を通して、学校教育現場の諸問題に的確に対応できる教員を育成します。そのために、以下に示すような学生を求めています。

- ① 小学校の全教科に関する学習と、専門分野(教育学、教育心理学、障害児教育、教科教育、理科、数学、音楽のいずれか)の学習に興味と意欲を持つ人
- ② 幅広い基礎的学力や技能を備え、学校教育の諸問題や各教科の教育について熱意を持って学ぶことにより、小学校の教員、さらには中学校・高等学校などの教員を目指す人

このほか、各選修においては、それぞれの選修の専門性に依じて、以下に示すような学生を求めています。

- （教育学選修，教育心理学選修）いじめや体罰，学力問題，発達障害など，多様な教育課題の解決に向けて学びたい人や，人のこころの「なぜ」を多面的に考えたい人
- （障害児教育選修）特別支援教育に携わる教員は専門性を求められることを理解し，熱意を持って小学校教員および特別支援学校教員になるための知識と指導力を身に付け，教員への道を目指す人
- （教科教育選修）小学校の教科等をどのように教えるのかを児童と共に学びながら，一つの教科についてはその特性や指導法を深く研究し，熱意を持って教員を目指す人
- （理科選修）理科の幅広い学習に興味を持ち，将来，児童・生徒に熱意を持って理科の面白さや実験の楽しさを伝えたい人
- （数学選修）算数，数学の基礎的な学力を持ち，それをもとに現在の算数，数学教育の問題点と解決策を考える人
- （音楽選修）音楽の基礎的な知識と技能を持ち，大学での学びを通して音楽への深い理解と確かな指導力を身に付け，熱意を持って教員を目指す人

【学校教育課程で学ぶために必要な能力や適性等および入学志願者に求める高等学校等での学習の取り組み】

文系，理系に偏らず，高等学校で履修する全ての教科・科目について，基礎的な知識を幅広く学習し，自分の考えを分かり易く文章や口頭で表現することが必要です。なお，技能が重要視される分野では，基礎的な技量を修得しておくことが求められます。将来，教師として活躍するためには，初等教育をめぐる諸問題に対して幅広い視野と強い関心を持つことが必要です。大学入学前にボランティア活動や学校内外での諸活動など教育に関わる何らかの実践を経験できる機会があれば積極的に挑戦することを期待します。

【2】入学者選抜の基本方針

文化教育学部の教育理念に基づき，教育目的・教育目標・教育方針に沿った人材を育成するために，開放性，客観性，公平性を旨とした多様な入試方法と多面的な評価方法により入学者を受け入れます。

一般入試

入学の機会を広く保障するために，大学受験資格を有する全ての者を対象とした一般入試を行います。一般入試では，「前期日程」と「後期日程」の2つの入試区分により，異なる観点から入学者を選考します。

【前期日程】

大学で学習するために必要な基礎学力として汎用的な学力を有しているかを判断するために，大学入試センター試験によって，高等学校までの学習到達度を評価します。また，個別学力検査においては，専門科目を理解するために必要な基礎学力または適性を有しているかを，各課程・選修が指定する評価方法（学力検査，実技検査）によって評価します。

【後期日程】

大学で学習するために必要な基礎学力として汎用的な学力を有しているかを判断するために，大学入試センター試験によって，高等学校までの学習到達度を評価します。また，個別学力検査においては，専門科目を理解するために必要な基礎学力または適性を有しているかを，各課程・選修が指定する評価方法（小論文，面接，実技検査）によって評価します。

特別入試

一般入試とは異なる観点により，多様な能力や資質を有し，本学部への志望動機が明確で意欲的な入学希望者を対象に特別入試を行います。特別入試では，「推薦入試 I」，「推薦入試 I（佐賀県枠）」と「AO入試」の3つの入試区分により，入学者を選考します。

【推薦入試 I】

出願要件を満たし、各高等学校長から推薦されることを前提とします。その上で、大学で学習するために必要な基礎学力として汎用的な学力を有しているかを、調査書、小論文（美術・工芸課程以外）および口頭試問（国際文化課程、人間環境課程〔健康福祉・スポーツ選修〕以外）によって評価します。また、専門科目を理解できる基礎学力または適性を有しているかを、小論文（美術・工芸課程以外）、口頭試問（国際文化課程、人間環境課程〔健康福祉・スポーツ選修〕以外）および実技検査（国際文化課程、人間環境課程〔生活・環境・技術選修〕以外）によって評価します。さらに、各課程・選修に対する明確な志望動機や入学後の学習意欲等を有しているかを、書類審査と面接試験によって評価します。

【推薦入試 I（佐賀県枠）】

出願要件を満たし、各高等学校長から推薦されることを前提とします。その上で、大学で学習するために必要な基礎学力として汎用的な学力を有しているかを、調査書、小論文、基礎学力試験によって評価します。また、専門科目を理解できる基礎学力と適性を有しているかを、小論文によって評価します。さらに、教科教育選修に対する明確な志望動機、教職を目指す強い意志、入学後の学習意欲等を有しているかを、書類審査と面接試験によって評価します。

【AO入試】

出願要件を満たしていることを前提とします。その上で、大学で学習するために必要な基礎学力として汎用的な学力を有しているかを、調査書、小論文（学校教育課程〔音楽選修〕のみ）、志願者評価書（人間環境課程〔健康福祉・スポーツ選修〕のみ）およびプレゼンテーション（人間環境課程〔健康福祉・スポーツ選修〕のみ）によって評価します。また、専門科目を理解できる基礎学力および適性を有しているかを、口頭試問、自己推薦書、レッスン形式による実技とソルフェージュ（学校教育課程〔音楽選修〕のみ）、志願者評価書（人間環境課程〔健康福祉・スポーツ選修〕のみ）およびプレゼンテーション（人間環境課程〔健康福祉・スポーツ選修〕のみ）によって評価します。さらに、各課程・選修に対する明確な志望動機や入学後の学習意欲等を有しているかを、書類審査と面接試験によって評価します。

編入学試験

各課程・選修の専門分野において、さらに高度な専門教育・研究を希望する学生を対象に3年次編入学試験を行います。編入学試験では、「一般入試」と「推薦入試」の2つの区分により、入学者を選考します。

【一般入試】

出願要件を満たしていることを前提とします。その上で、専門科目を理解できる基礎学力または適性を有しているかを、学力検査（外国語）（美術・工芸課程以外）、成績証明書、小論文（国際文化課程、人間環境課程〔生活・環境・技術選修〕のみ）、口頭試問（人間環境課程のみ）および実技検査（美術・工芸課程のみ）によって評価します。また、各学科に対する明確な志望動機や入学後の学習意欲等を有しているかを、面接試験（人間環境課程、美術・工芸課程のみ）によって評価します。

【推薦入試】

出願要件を満たし、各所属長から推薦されることを前提とします。その上で、専門科目を理解できる基礎学力または適性を有しているかを、推薦書と小論文によって評価します。また、明確な志望動機や入学後の学習意欲等を有しているかを、書類審査と面接試験によって評価します。

私費外国人留学生入試

外国人留学生に対する入学の機会を保障するために、私費外国人留学生入試を行います。本入試では、日本留学試験、TOEFLの成績、日本語作文（学校教育課程〔音楽選修〕と美術・工芸課程以外）および面接試験によって、入学後の学習に必要な語学力について評価します。また、大学で学習するために必要な基礎学力（汎用的な能力および専門科目を理解できる基礎学力または適性を含む）を有しているかを、日本留学試験、書類審査（成績証明書等）、実技検査（学校教育課程〔音楽選修〕と美術・工芸課程のみ）によって評価します。さらに、各課程・選修に対する明確な志望動機や入学後の学習意欲等を有しているかを、面接試験によって評価します。

（出典：文化教育学部資料）

資料 7 文化教育学部入学者受入れの方針(「文化教育学部で学ぶために必要な能力や適性等とその評価方法」)

観点	入学後に必要な能力や適性等	評価方法	入試方法	対象課程・選修
知識・理解・思考・判断	大学で学ぶために必要な基礎学力	大学入試センター試験において、5教科7科目(または6教科7科目)の総合的な基礎学力を評価します。	一般入試(前期日程)	学校教育課程 (教育学選修, 教育心理学選修, 障害児教育選修, 教科教育選修, 理科選修) 国際文化課程 人間環境課程
			一般入試(後期日程)	学校教育課程(理科選修)
		大学入試センター試験において、5教科6科目の総合的な基礎学力を評価します。	一般入試(前期日程) 一般入試(後期日程)	学校教育課程(数学選修)
		大学入試センター試験において、3教科3科目の国語, 外国語を中心とした基礎学力を評価します。	一般入試(前期日程) 一般入試(後期日程)	美術・工芸課程
			一般入試(前期日程)	学校教育課程(音楽選修)
		大学入試センター試験において、5教科5科目の主要科目についての基礎学力を評価します。	一般入試(後期日程)	学校教育課程 (教育学選修, 教育心理学選修, 障害児教育選修, 教科教育選修) 国際文化課程 人間環境課程
			特別入試(推薦入試 I)	学校教育課程(教科教育選修) 国際文化課程 人間環境課程 美術・工芸課程
		調査書によって、高等学校時代における学業成績, 学習態度を評価します。	特別入試(推薦入試 I (佐賀県枠))	学校教育課程(教科教育選修)
			特別入試(A0入試)	学校教育課程(音楽選修) 人間環境課程 (健康福祉・スポーツ選修)
			一般入試(後期日程)	学校教育課程 (理科選修, 数学選修)
			特別入試(推薦入試 I)	学校教育課程(教科教育選修) 人間環境課程 (生活・環境・技術選修) 美術・工芸課程
		口頭試問によって、志望課程・選修で学ぶために必要な基礎的な知識とその理解力を評価します。	特別入試(A0入試)	学校教育課程(音楽選修) 人間環境課程 (健康福祉・スポーツ選修)
			3年次編入学試験(一般入試)	人間環境課程
			一般入試(後期日程)	学校教育課程 (教育学選修, 教育心理学選修, 障害児教育選修, 教科教育選修) 国際文化課程 人間環境課程
		小論文によって、「問題理解力」, 「文章構成力」, 「論理性」, 「表現力」, 「知識」について評価します。	特別入試(推薦入試 I)	学校教育課程(教科教育選修) 国際文化課程 人間環境課程
			特別入試(推薦入試 I (佐賀県枠))	学校教育課程(教科教育選修)
			特別入試(A0入試)	学校教育課程(音楽選修)
			3年次編入学試験(推薦入試)	人間環境課程
			3年次編入学試験(一般入試)	国際文化課程 人間環境課程 (生活・環境・技術選修)
		基礎学力試験によって、外国語(英語)と数学について高等学校教科書レベルの基礎学力を評価します。	特別入試(推薦入試 I (佐賀県枠))	学校教育課程(教科教育選修)
志願者評価書によって、第三者の評価を参考に、汎用的な学力を身につけているかを評価します。	特別入試(A0入試)	人間環境課程 (健康福祉・スポーツ選修)		
プレゼンテーションによって、自己表現力および自分の考えを相手に正しく伝える力を身につけているかを評価します。	特別入試(A0入試)	人間環境課程 (健康福祉・スポーツ選修)		
日本留学試験において、課程・選修が指定した科目について基礎的な学力を評価します。	私費外国人留学生入試	全課程		
日本語作文および面接試験において、基本的な語学力を評価します。	私費外国人留学生入試	学校教育課程(音楽選修以外) 国際文化課程 人間環境課程		

観点	入学後に必要な能力や適性等	評価方法	入試方法	対象課程・選修
知識・理解・思考・判断に必要な基礎学力	大学で学ぶために必要な汎用的な学力	書類審査(成績証明書等)において、これまでの学習状況を評価します。	3年次編入学試験(推薦入試)	人間環境課程
			3年次編入学試験(一般入試)	国際文化課程 人間環境課程 美術・工芸課程
		TOEFLの得点を用いて、基礎的な英語力を評価します。	私費外国人留学生入試	全課程
			私費外国人留学生入試	全課程
	専門科目を学ぶために必要な基礎学力および適性	大学入試センター試験において、5教科7科目(または6教科7科目)の総合的な基礎学力を評価します。	一般入試(前期日程)	学校教育課程 (教育学選修, 教育心理学選修, 障害児教育選修, 教科教育選修, 理科選修) 国際文化課程 人間環境課程
			一般入試(後期日程)	学校教育課程(理科選修)
		大学入試センター試験において、5教科6科目の総合的な基礎学力を評価します。	一般入試(前期日程)	学校教育課程(数学選修)
			一般入試(後期日程)	
		大学入試センター試験において、3教科3科目の国語・外国語を中心とした基礎学力を評価します。	一般入試(前期日程)	美術・工芸課程
			一般入試(後期日程)	
		大学入試センター試験において、5教科5科目の主要科目についての基礎学力を評価します。	一般入試(前期日程)	学校教育課程(音楽選修)
			一般入試(後期日程)	学校教育課程 (教育学選修, 教育心理学選修, 障害児教育選修, 教科教育選修) 国際文化課程 人間環境課程
		個別学力検査において、高等学校で履修する国語、数学、英語の中から1教科について、標準的な知識と理解、それに基づく論理的な思考力を記述式によって評価します。	一般入試(前期日程)	学校教育課程 (教育学選修, 教育心理学選修, 障害児教育選修, 教科教育選修, 理科選修) 人間環境課程
		個別学力検査において、高等学校で履修する数学について、標準的な知識と理解、それに基づく論理的な思考力を記述式によって評価します。	一般入試(前期日程)	学校教育課程(数学選修のみ)
		個別学力検査において、高等学校で履修する国語と英語について、基礎的な知識だけでなく、長文読解力、論理的思考力および表現力等を有しているかを記述式によって評価します。	一般入試(前期日程)	国際文化課程
			一般入試(後期日程)	学校教育課程 (教育学選修, 教育心理学選修, 障害児教育選修, 教科教育選修) 国際文化課程 人間環境課程
		小論文によって、「問題理解力」、「文章構成力」、「論理性」、「表現力」、「知識」について評価します。	特別入試(推薦入試Ⅰ)	学校教育課程(教科教育選修) 国際文化課程 人間環境課程
			特別入試(推薦入試Ⅰ(佐賀県枠))	学校教育課程(教科教育選修)
			特別入試(AO入試)	学校教育課程(音楽選修)
			3年次編入学試験(一般入試)	国際文化課程 人間環境課程 (生活・環境・技術選修)
	実技検査において、志望課程・選修で学ぶために必要な基礎的な技術および適性について評価します。	3年次編入学試験(推薦入試)	人間環境課程	
		一般入試(前期日程)	学校教育課程(音楽選修) 美術・工芸課程	
		一般入試(後期日程)	美術・工芸課程	
特別入試(推薦入試Ⅰ)		学校教育課程(教科教育選修) 人間環境課程 (健康福祉・スポーツ選修) 美術・工芸課程		
特別入試(AO入試)		学校教育課程(音楽選修)		
3年次編入学試験(一般入試)		美術・工芸課程		
私費外国人留学生入試		学校教育課程(音楽選修) 美術・工芸課程		

観点	入学後に必要な能力や適性等	評価方法	入試方法	対象課程・選修	
知識・理解・思考・判断	大学で学ぶために必要な基礎学力および適性 専門科目を学ぶために必要な基礎学力および適性	口頭試問によって、志望課程・選修で学ぶために必要な基礎的な知識とその理解力を評価します。	一般入試（後期日程）	学校教育課程 （理科選修，数学選修）	
			特別入試（推薦入試 I）	学校教育課程（教科教育選修） 人間環境課程 （生活・環境・技術選修） 美術・工芸課程	
			特別入試（AO入試）	学校教育課程（音楽選修） 人間環境課程 （健康福祉・スポーツ選修）	
			3 年次編入学試験（一般入試）	人間環境課程	
			特別入試（AO入試）	人間環境課程 （健康福祉・スポーツ選修）	
			特別入試（AO入試）	人間環境課程 （健康福祉・スポーツ選修）	
			3 年次編入学試験（一般入試）	国際文化課程 人間環境課程	
			3 年次編入学試験（一般入試）	国際文化課程 人間環境課程 美術・工芸課程	
			3 年次編入学試験（推薦入試）	人間環境課程	
			私費外国人留学生入試	全課程	
興味・関心・態度・意欲	志望課程・選修で学ぶための明確な志望動機や入学後の学習意欲	調査書等によって、高等学校時代における課外活動や志望課程・選修での学習と関連する実績等を評価します。	特別入試（推薦入試 I）	学校教育課程（教科教育選修） 国際文化課程 人間環境課程 美術・工芸課程	
			特別入試（推薦入試 I（佐賀県枠））	学校教育課程（教科教育選修）	
			特別入試（AO入試）	学校教育課程（音楽選修） 人間環境課程 （健康福祉・スポーツ選修）	
			3 年次編入学試験（推薦入試）	人間環境課程	
			3 年次編入学試験（一般入試）	国際文化課程 人間環境課程 美術・工芸課程	
			推薦書において、推薦の理由を評価の参考にします。	特別入試（推薦入試 I）	学校教育課程（教科教育選修） 国際文化課程 人間環境課程 美術・工芸課程
			特別入試（推薦入試 I（佐賀県枠））	学校教育課程（教科教育選修）	
			3 年次編入学試験（推薦入試）	人間環境課程	
			自己推薦書において、推薦の理由を評価の参考にします。	特別入試（AO入試）	学校教育課程（音楽選修） 人間環境課程 （健康福祉・スポーツ選修）
			志望理由書において、当該選修を志望する理由を評価します。	特別入試（推薦入試 I（佐賀県枠））	学校教育課程（教科教育選修）
			本人自筆の作文において、志望動機を評価の参考にします。	特別入試（推薦入試 I）	人間環境課程
			面接試験において、志望課程・選修で学ぶ動機、意欲 積極性、一般的態度等を評価します。	一般入試（後期日程）	学校教育課程 （理科選修，数学選修）
				特別入試（推薦入試 I）	学校教育課程（教科教育選修） 国際文化課程 人間環境課程 美術・工芸課程
				特別入試（推薦入試 I（佐賀県枠））	学校教育課程（教科教育選修）
				特別入試（AO入試）	学校教育課程（音楽選修） 人間環境課程 （健康福祉・スポーツ選修）
				3 年次編入学試験（一般入試）	人間環境課程 美術・工芸課程
3 年次編入学試験（推薦入試）	人間環境課程				
私費外国人留学生入試	全課程				

（出典：文化教育学部資料）

入学者選抜は、「特別入試（推薦・AO）」、「一般試験（前期日程・後期日程）」、「私費外国人」、「3年次編入（推薦・一般）」の区分で実施しており、多様な観点から学生を集めるために必要に応じて実技試験、面接などを行っている。また、佐賀県の中核的な教員養成のために佐賀県教育委員会から特に強く教員を志望している高校生を推薦してもらい、さらに文化教育学部でも厳しく選考する「特別入試（佐賀県枠）」という推薦入試制度を導入した。また、AO入試においては入学前に事前教育を行い、より円滑に大学での学習ができるように工夫している。

入学者の入学後の状況については、アドミッションセンターで独自開発した入学者追跡システムを用いて分析し、継続的に入学者選抜方法の効果を検証している。

教師という職業や教育分野に興味がある県内の高校生を対象に、「高校の3年間と大学の4年間で教師を育む」というコンセプトで継続・育成型の高大連携プログラム「教師へのとびら」を開発・実施し（参加登録者：平成26年度103人、平成27年度182人）、修了者のうち平成27年度に1人が文化教育学部に、平成28年度には4人が教育学部に入学している。

資料8 「教師へのとびら」平成27年度参加実績

実施日	高1		高2		高3		全体	
	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続
第1回（6/27）	43	—	58	21	23	16	124	37
第2回（8/7）	37	—	28	17	18	13	83	30
第3回（10/24）	22	—	23	16	20	18	65	34

（出典：文化教育学部資料）

1-1-4 教員の教育力向上のための体制の整備

佐賀大学第2期中期目標期間中の「質保証体制を強化し、教育の質の改善のためのPDCAサイクル機能を強化する」に則り次のような活動を実施している。

- （1）FD講演会（資料9）や新任教員研修会を適宜実施している。前者については教授会に組み込んで開催し、出席者を増加させた。

資料9 平成22～27年度FD活動の実施状況

		新任教員研修会	FD講演会
平成22年度	日時	平成22年4月2日（金） 16:00-17:00	平成22年11月17日（水） 17:00~18:30
	場所	学部応接室	教養教育機構会議室
	説明者・講師	主要委員長	小野博講師（メディア教育開発センター名誉教授、昭和大学客員教授）
	内容	学部規則・委員会活動など	日本人大学生を対象とした日本語・英語教育～リメディアル教育から実力養成教育への展開～
	参加者	新任・昇任教員3人、その他の教員13人	教員46人（文化教育学部からは25人）
	日時	平成22年8月26日（木） 16:00-17:00	
	場所	学部長室	
説明者・講師	主要委員長		
内容	学部規則・委員会活動など		

	参加者	新任・昇任教員 1 人, その 他の教員 5 人	
平成 23 年度	日時	平成 23 年 4 月 4 日 (月) 16:00-17:00	平成 23 年 11 月 2 日 (水) 15:45-
	場所	学部応接室	4 号館 4 階大会議室
	説明者・講師	主要委員長	西郡大講師 (アドミッションセンター)
	内容	学部規則・委員会活動など	18 歳人口減少がもたらす入試の実態 ～文化教育学部におけるこれまでの傾向と今後の 予想～
	参加者	新任・昇任教員 7 人, その 他の教員 12 人	教員 97 人
平成 24 年度	日時	平成 24 年 4 月 2 日 (火) 16:00-17:00	平成 24 年 11 月 7 日 (水) 16:30-
	場所	学部応接室	4 号館 4 階大会議室
	説明者・講師	主要委員長	倉本哲男講師 (文化教育学部附属教育実践総合センター)
	内容	学部規則・委員会活動など	学生とともにすすめる講義、及び論文指導
	参加者	新任・昇任教員 12 人, その 他の教員 11 人	教員 93 人
	日時	平成 24 年 10 月 1 日 (月) 16:00-17:00	/
	場所	学部応接室	
	説明者・講師	主要委員長	
	内容	学部規則・委員会活動など	
参加者	新任・昇任教員 6 人, その 他の教員 11 人		
平成 25 年度	日時	平成 25 年 4 月 1 日 (月) 16:00-17:00	平成 25 年 11 月 20 日 (水) 17:20-
	場所	教養教育 1 号館 1 階会議室	教養教育大講義室
	説明者・講師	主要委員長	角和博講師 (文化教育学部附属教育実践総合セ ンター)
	内容	学部規則・委員会活動など	佐賀大学における e ラーニング機能の活用につ いて
	参加者	新任・昇任教員 6 人, その 他の教員 17 人	教員 90 人
	日時	平成 25 年 10 月 1 日 (月) 16:00-17:00	/
	場所	教養教育 1 号館 1 階会議室	
	説明者・講師	主要委員長	
	内容	学部規則・委員会活動など	
参加者	新任・昇任教員 7 人, その 他の教員 20 人		
平成 26 年度	日時	平成 26 年 4 月 1 日 (火) 16:00-17:00	平成 27 年 1 月 14 日 (水) 15:45-17:00
	場所	学部応接室	1 号館多目的室
	説明者・講師	主要委員長	山内一祥講師 (全学教育機構 高等教育開発室)
	内容	学部規則・委員会活動など	アクティブラーニングとその手法
	参加者	新任・昇任教員 7 人, その 他の教員 11 人	教員 91 人
平成 27 年度	日時	平成 27 年 4 月 1 日 (水) 16:00-17:00	平成 28 年 2 月 17 日 (水) 16:30-17:30
	場所	1 号館多目的室	1 号館多目的室
	説明者・講師	主要委員長	中島俊思講師 (学生支援室)
	内容	学部規則・委員会活動など	大学生のメンタルヘルス～問題兆候への気づき と関わりについて～
	参加者	新任・昇任教員 16 人, その 他の教員 20 人	教員 85 人

(出典: 文化教育学部資料)

(2) 平成 22 年度から各教員の教育力向上のためにティーチング・ポートフォリオ (TP) への取組 (TP 作成ワークショップ開催等) が全学的に行われている。文化教育学部教員の簡易版 TP の作成率は 100% を達成している。

(3) 毎年「学生による授業評価アンケート」を実施しており、その結果は各教員にフィードバックされ、授業の改善を図っている。

資料 10 「授業点検・改善報告」の例

佐賀大学 授業点検・改善

氏名	×× ××
年学期	2014 年度 前学期

●授業の優れていた点【授業全体／科目別】

- ① 授業の仕方に関して：
アクティブラーニングの手法を学び取り入れることを心がけたので、学生との対話時間が増し、どこで理解が滞っているかなど、学生を観察する目が養われたことにより、(科目にもよるが) 教員の発言に対して学生が傾聴してくれるようになっている。
- ② 授業内容に関して：
知識の系統化を意識し、対面を意識しパワーポイントやトピックスに偏ることを避けるなど、興味を持たせることよりも学習自体の楽しさを体験してもらえるように心がけた結果、少しずつだが、学生がまじめに取り組む等、変化してきていると感ずることができている。

●授業の改善を要する点【授業全体／科目別】

- ① 学生との対話時間が大きく増したが、学生との受け答えにおいて話を長く続けることができず、教員自身の傾聴力を強化しないといけないと感じた。
- ② 変化を感じる学生の数は多いが、まだ学習成果として現れてきたとはいえないので、実質的に学習成果に反映できるような授業運用力をつけることが課題である。
- ③ まだ、学生の授業前後での理解度を測ることができておらず、スモールステップを考えた授業内容の構築が課題である。

●授業改善目標

- ① 学生との対話時間を長く持つ (授業時間の半分以上の時間は何らかの対話時間としたい)
- ② 自主的に授業に取り組む学生の数を 9 割以上とする
- ③ 1 コマ毎の授業内容のステップアップをさらに考えた内容を構築し、1 コマの授業内容を大切にし、限られた時間で学生が身につけられる知識や技能の密度を上げる。
- ④ おそらく学生はわかるだろうという自身の学生時代の経験から、指示内容があいまいになることが多いので、具体的に指示できる技能を高める。

(出典：文化教育学部資料)

1-1-5 教育プログラムの質向上のための体制の整備

「学士課程における教育の質保証に関する方針」および「学士課程における教育の質保証の推進に係るガイドライン」に基づき、教育の質保証体制の整備のため次のような方策を行っている。

(1) 「シラバス作成の手引き」を定め、学習の成果を測定可能な表現による到達目標の記載、準備学習など自主的学習を促す指示や課題等の記載、到達目標に対応した成績評価の方法と基準の記載など、授業科目の質を担保する諸項目を備えたシラバスを作成している。

上記の記載を確実にするためシラバス点検を実施している。本学部においては全授業に対してシラバス点検を実施している。

資料 11 シラバス (例)

回	内容	授業以外の学習
1	家庭科のイメージと現状(家庭科がもつイメージ/家庭科教育の現状)	(大時の予習)授業中に配布されたプリントの問題を調べておく。
2	戦前の家庭的科教育の歴史(江戸時代の女性観と女子教育/明治時代の家庭的科教育/大正・昭和初期の家庭的科教育/裁縫科・家事科)	(大時の予習)授業中に配布されたプリントの問題を調べておく。
3	戦後の家庭科教育の歴史(小学校学習指導要領の変遷/中学校学習指導要領の変遷/高等学校学習指導要領の変遷)	(復習)なぜ学校教育に家庭科が必要なのか、自己の意見をまとめる。
4	日本の家族はもうなくなっているのか 事実を正確に認識することの重要性	(本時の予習)日本の家族の少子高齢化の現状について調べておく。
5	家族の授業をどう進めるか(1)家族をどう定義するか(ワークの意義)	(大時の予習)プリントに示された課題に沿ってワークを考える。
6	家族の授業をどう進めるか(2)家族の決まりごとをどう学ぶか	(復習)家庭科は「将来役に立つ」ための教科ではないと言われる理由について考える。
7	家庭科で何を教えるのか 家教学の定義と家庭科の教科構造	(予習)これまでの家庭科でどんなことを学んできたかを整理しておく。
8	環境教育としての家庭科	(予習)佐賀大学のごみの分別方法を調べておく。
9	消費者教育としての家庭科	(予習)消費者の権利とは何か調べておく。
10	指導案の分析(1)題材設定の理由(1)何を書くか	(予習)家庭科の学習指導案を集めておく。
11	指導案の分析(2)目標をどのように設定するか	(復習)任意の題材について、何故学ぶ必要があるのかを考える。
12	指導案の分析(3)学習指導方法	(予習)家庭科の学習指導方法をリストアップする。
13	指導案の分析(4)評価方法	(復習)家庭科における評価方法の課題を調べ、解決策を考える。
14	多様な家庭科	(復習)アメリカの家庭科と日本の家庭科の違いをまとめる。
15	家庭科教育とは	(予習)これまでの授業における考察を基に、再度家庭科とは何かを考えておく。

成績評価の方法と基準	上記の到達目標について 定期試験 40点 ミニレポート 40点 授業中の発言等 20点 により評価を行う。 レポート評価規準は次の通り。 1. 題意の把握 2. 論旨の明確さ 3. 論理性 4. 独創性 5. 構成 6. 表現(誤字・脱字、字の丁寧さ等含む) 7. 体裁								
開示する試験問題等	期末試験問題の正解例								
開示方法	研究室前の掲示板に掲示する								
教科書	<table border="1"> <thead> <tr> <th>資料名</th> <th>版</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>著者名</td> <td>発行所名・発行者名</td> </tr> <tr> <td colspan="2">備考(巻用:上下、ISBN等)</td> </tr> <tr> <td colspan="2">教科書は用いない。必要に応じてプリントを配布する。</td> </tr> </tbody> </table>	資料名	版	著者名	発行所名・発行者名	備考(巻用:上下、ISBN等)		教科書は用いない。必要に応じてプリントを配布する。	
資料名	版								
著者名	発行所名・発行者名								
備考(巻用:上下、ISBN等)									
教科書は用いない。必要に応じてプリントを配布する。									
オフィスアワー	火曜日 1校時								
その他	他の時間も予約をすれば相談に応じる。連絡先nakanisy@cc.saga-u.ac.jp								

LiveCampus Academic Affairs System

シラバス参照

タイトル「2014年度」フォルダ「学部-文化教育学部」
シラバスの詳細は以下となります。

開講年度	2014	開講時期	前期
科目コード	23281000		
科目名	中等家庭科教育法 I		
担当教員(所属)	中西 雪夫(文化教育学部)		
単位数	2		
曜日・校時	月4		
学水力番号	2(2)プロフェッショナルとして課題を発見し解決する能力		
講義形式	本科目は講義及び実習による1単位の科目である。		
講義概要	中学校教員として家庭科の授業を実施するにあたり必要な基礎的な知識・技能の習得を目的とする。		
開講意図	中学校教員として、本来の家庭科の理念に基づいた家庭科教育を実施できる態度を形成するため、以下の事項を習得する。 家庭科教育の理念について理解できる。 家庭科教育が抱える問題を、社会背景や歴史背景の視点から理解できる。 中学校学習指導要領家庭科編の内容を理解できる。 中学校家庭科の授業の基本的な展開を考察することができる。		
到達目標	(1)家庭科誕生の背景について説明できる。 (2)ジェンダーの視点から家庭科の意義を考察することができる。 (3)日本の家族の現状について正確に説明できる。 (4)家庭科の授業づくりで必須となる要件を説明できる。 (5)中学校家庭科の内容の構成を説明できる。 (6)学習指導要領の要素について説明できる。 (7)授業の要素について説明できる。		
聴講指定	学校教育課程		
履修上の注意	1. 規則で認められている欠席は忌引きのみであるが、部活動等によりやむを得ず欠席する場合は、事前に申し出ればレポート等によって配慮する。また、病欠等も同様。いずれの場合も欠席した日の授業内容を友人等から聞き、レポートの主題を自ら設定し翌週の授業まで提出すること。 2. 授業中は飲食物を机の上に載せない。携帯電話の電源は切る。違反した場合は退室してもらう。 3. その他授業中のルールは第1回目の講義で話合って決める。		

(出典：文化教育学部資料)

資料 12 シラバス点検表

科目名： _____ 開講時期 _____
 担当者： _____ 作成者： _____
 点検者： _____

学士力番号	<input type="checkbox"/> 対応する学士力番号すべてを記載している。【学士課程のみ必須】
講義形式	<input type="checkbox"/> 授業形態（「講義」、「演習」、「実験」など）を単位数と授業時数に基づいて記載している。【必須】
講義概要	<input type="checkbox"/> 授業内容、実施方法、全体の流れ、心構えなどが、 教員の観点から 、「(教員が)板書とスライドを用いて〇〇について説明し、毎回小テストを実施する」のように大まかに記述されている。【必須】
開講意図	<input type="checkbox"/> 「(学生は)△△について理解する」、「(学生が)〇〇について、△△することを通じて、□□できる」のように、 学生の観点から 、授業のねらいや目的などが、分かりやすく記述されている。【必須】
到達目標	<input type="checkbox"/> 「(学生が)〇〇できる」のように、学生にできるようになってほしい事柄が、 学生の観点から 、分かりやすく記述されている。【必須】 <input type="checkbox"/> 達成度が測定できるように 1つの文章に1つの目標 が記載されている。【必須】
履修上の注意	<input type="checkbox"/> 事前に履修が必要な科目や能力が記載されている。 <input type="checkbox"/> 利用する機器あるいは利用していない機器などについて記載されている。 <input type="checkbox"/> 履修する際の心構えやルールなどが記載されている。
授業計画	<input type="checkbox"/> 半期15回分（通年30回分）を回ごとに記載している。複数回まとめて記載する場合は、に「 〇〇入門1 」、「 〇〇入門2 」といった書き方をせず、その内容を具体的に書いている。【必須】 <input type="checkbox"/> 授業時間以外の学習について具体的に記載 している。「特になし」等、授業時間外の学習が不要と勘違いされるような表現をしていない。【必須】
成績評価の方法と基準	<input type="checkbox"/> 成績評価方法、基準、割合が明記されている。【必須】 <input type="checkbox"/> 成績評価方法は、すべての到達目標と対応づけられている。【必須】 <input type="checkbox"/> 「平常点」を成績に考慮する場合、その内容を具体的に記載 している。【必須】 <input type="checkbox"/> 「放棄」という表現を使っていない 。【必須】
開示する試験問題等	<input type="checkbox"/> 「開示しない」とせず、履修者へ 開示する内容が具体的に記載 されている。【必須】
開示方法	<input type="checkbox"/> 「開示しない」とせず、履修者への開示方法が具体的に記載されている。【必須】
教科書	<input type="checkbox"/> 教科書を利用する場合は、書籍情報が記載されている。教科書を使用しない場合は、その旨を記載している。【必須】
リンク	<input type="checkbox"/> ティーチング・ポートフォリオへのリンクが指定されている。 <input type="checkbox"/> 授業に必要なあるいは有益なサイトへのリンクが指定されている。
オフィスアワー	<input type="checkbox"/> オフィスアワーが、具体的に設定されている。ただ単に「随時」とは記載していない。【必須】
その他	<input type="checkbox"/> J A B E E に対応した科目の場合、対応する学習教育目標が記載されている。「到達目標」に記載してもよい。

(出典：文化教育学部資料)

(2) 単位制度の実質化に向けた履修登録の上限設定（CAP制度）を導入し、学習時間の確保を行うとともに、GPAが一定基準を越える成績優秀者に対しては、CAP制度を緩和して学習の発展に配慮している。

(3) 単位認定の厳格化の取組として各授業科目における成績評定値の分布を指標として、成績評価の適切性の検証を担当教員の属する講座で行いFD委員会に報告している。90%以上「秀」の成績が出されている科目に関して担当教員は理由書を提出している。

(4) ウェブ上のシステムとして、ラーニング・ポートフォリオ（LP）を導入した。学生にLPに入力させ、それに基づいて、チューターが面接を学期ごとに行い、指導記録をLPに残すという継続性のある指導体制を整えた。

(5) 教職課程科目の履修履歴を明確に把握し、指導をスムーズに行なうことを目的にL

P内に「教職カルテ」を導入した。教職チューターが各年度の面接指導を行う際や、4年次後期開講の「教職実践演習」において必要な資質形成がなされたかをチェックする際に用いられている。

資料 13 教職カルテ

教職カルテ					
所属	文化教育学部				
学籍番号		氏名		生年月日	
取得希望免許					
教職志望の動機・理由、理想的な教師像について					
教職チューター所見（面接後に記入）					
日付		氏名		コメント	
教職に関する科目の履修状況					
年学期	科目			単位	評価
教科に関する科目の履修状況					
年学期	科目			単位	評価
必要な資質能力の指標					
領域	項目	指標	1年次	2年次	
A. 使命感や責任感、教育的愛情	1. 教育の時事問題	学力問題、いじめ、不登校、特別支援教育などの学校教育に関する今日的な課題に関心を持ち、自分なりに意見を述べることができる。			
	2. 教職の意義と責務	教職の価値や教員の役割、職務内容について基本的なことを理解し、子どもに対する愛情と責務を感じている。			
	3. 学校教育の理念・歴史・思想	学校教育に関する理念と歴史、思想についての基礎的な理論・知識を習得している。			
	4. 学校教育の社会的位置づけ・制度・運営	学校教育の社会的位置づけ、制度、運営に関する基礎的な理論・知識を習得している。			
B. 社会性や対人関係能力	1. 他者意見の受容	自分の意見を述べるとともに、他者の意見やアドバイスに耳を傾け、その理解や協力を得て教育実践に取り組むことができる。			
	2. 保護者・地域との連携・協力	保護者や地域住民との連携・協力の重要性について述べるができる。			
	3. 同僚性	教育実習の指導教員や他の教育実習生と共同して授業等の教育活動を企画・運営・展開することができる。			

	4. 社会人としての常識	教師にも求められる一般社会人としての挨拶、身だしなみ、言葉遣いを適切に整え、他者との間で必要なコミュニケーションができる。		
C. 生徒理解や学級経営	1. 課題認識と探求心	教職を志望する自己の課題を認識し、その解決にむけて、子ども理解と学校のあり方について学び続ける姿勢を持っている。		
	2. 学級経営の構想	子どもたちと学級を想定し、簡略な学級経営案を作成することができる。		
	3. 子どもの心理と発達	子ども理解のために必要な子どもの心理と発達に関する基礎的な知識を習得し、適切に対応することができる。		
	4. 子どもに応じた対応	学力問題、いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の子どもの特性や状況に応じた対応の必要性と方法について理解している。		
D. 教科等の指導力	1. 教科の専門的内容	自分が免許の取得を希望している科目において、これまで履修した教職に関する科目、及び教科に関する科目の講義内容について理解している。		
	2. 学習指導要領・教育課程	取得免許教科の学習指導要領の目標と内容について理解するとともに、教育課程の編成に関する基礎的な理論・知識を習得している。		
	3. 道徳教育・特別活動・総合的な学習の時間	道徳教育・特別活動・総合的な学習の時間の目標と内容、指導方法に関する基礎的な理論・知識を習得している。		
	4. 授業の構想と学習指導案	目標となる指導すべき教育内容（質の高い知識、技能等）を研究して授業を構想し、子どもの反応を想定した学習指導案を作成することができる。		
	5. 教材・教具の作成	教育内容に応じて、目標を達成するために必要な教材・教具について考え、それらを適切に作成することができる。		
	6. 表現技術	板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けている。		
	7. 授業実践とその省察	子どもの反応を生かし、学級集団として子どもたちを協力させながら授業を展開し、授業を終えるとそれを振り返って、その改善について考察することができる。		
	8. 情報機器の活用	情報機器について、基礎的な知識を習得し、授業実践に活用することができる。		

教職を目指す上で課題と考えている事項	
1 年次	
2 年次	

(出典：文化教育学部資料)

(6) 休講した場合はウェブ上で補講報告書を提出することを義務付けるなど授業時間数確保のための取組を行っている。また、休講理由の一覧の提出など休講を減少させるために教員の意識改革を目的とした取組を平成 25 年度から行った。休講率は (資料 14)

のように減少した。

資料 14 休講率

年 度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
前学期	—	1.53%	0.87%
後学期	2.5%	1.25%	1.25%

(出典：文化教育学部資料)

(水準)

教育の実施体制は「期待される水準にある」と判断できる。

(判断理由)

- ・ 外国人教員，女性教員，任期付き教員など多様な教員の確保に努め効果を上げている。
- ・ 「入学者選抜の基本方針」などを明確に定めるなど受験生にわかりやすいシステムを構築している。
- ・ F D 講演会の実施，T P 作成ワークショップ開催など教員の教育力向上に効果的な体制を構築し運用している。
- ・ L P，教職カルテの導入など教育プログラムの質向上のために新しいシステムを導入している。

観点 1-2 教育内容・方法

(観点に係る状況)

1-2-1 体系的な教育課程の編成状況

平成 22 年度に「佐賀大学学士力」が定められたことを受けて、本学部においても「学位授与の方針」や「教育課程編成・実施の方針」を明確化し、「学士力と科目との対応」表および「カリキュラムマップ」を作成して教育課程の体系的性を学生に周知している。(資料 15～18)

資料 15 佐賀大学学士力

佐賀大学 学士力

佐賀大学では、基礎的及び専門的な知識と技能に基づいて課題を発見し解決する能力を培い、個人として生涯にわたって成長し、社会の持続的発展を支える人材を養成する。そのために、佐賀大学の学士力を次のとおり位置づける。

1. 基礎的な知識と技能

(1) 文化と自然

世界を認識するための幅広い知識を有機的に関連づけて修得し、文化（芸術及びスポーツを含む）的素養を身につけている。

(2) 現代社会と生活

健全な社会や健康な生活に関する種々の知識を修得し、生活の質の向上に役立てることができる。

(3) 言語・情報・科学リテラシー

① 日本語による文書と会話で他者の意思を的確に理解できるとともに、自らの意思を表現し他者の理解を得ることができる。英語を用いて、専門分野の知識を修得でき、自己の考えを発信できる。初修外国語を用いて、簡単な会話ができ平易な文章を読み書きできる。

② 情報を収集し、その適正を判断でき、適切に活用・管理できる。

③ 科学的素養を有し、合理的及び論理的な判断ができる。

(4) 専門分野の基礎的な知識と技法

専門分野において、基本概念や原理を理解して説明でき、一般的に用いられている重要な技法に習熟している。

2. 課題発見・解決能力

(1) 現代的課題を見出し、解決の方法を探る能力

現代社会における諸問題を多面的に考察し、その解決に役立つ情報を収集し分析できる。

(2) プロフェッショナルとして課題を発見し解決する能力

専門分野の課題を発見し、その解決に向けて専門分野の基礎的な知識と技法を応用することができる。

(3) 課題解決につながる協調性と指導力

課題解決のために、他者と協調・協働して行動でき、また、他者に方向性を示すことができる。

3. 個人と社会の持続的発展を支える力

(1) 多様な文化と価値観を理解し共生に向かう力

文化や伝統などの違いを踏まえて、平和な社会の実現のために他者の立場で物事を考えることができる。また、自然環境や社会的弱者に配慮することができる。

(2) 持続的な学習力と社会への参画力

様々な問題に積極的に関心を持ち、自主的・自律的に学習を続けることができる。自己の生き方を考察し、主体的に社会的役割を選択・決定し、生涯にわたり自己を活かす意欲がある。

(3) 高い倫理観と社会的責任感

高い倫理観を身につけ社会生活で守るべき規範を遵守し、自己の能力を社会の健全な発展に寄与しうる姿勢を身につけている。

備考

1. 各項目の実施組織および実施方法は、別に定める。

2. 各項目に対応する授業科目の数・単位数は、学部が定めるところによる。

(出典：文化教育学部資料)

資料 16 学位授与の方針の例

【学位授与の方針】（学校教育学課程）

教育目標に照らして（佐賀大学の学士力を踏まえて）、学生が身につけるべき以下の具体的学習成果の達成を学位授与の方針とする。また、学則に定める所定の単位を修得した者には、教授会の議を経て、学長が卒業を認定し、学位記を授与する。

1. 基礎的な知識と技能

- (1) 文化・自然・現代社会と生活に関する授業科目を履修・修得し、それらの知識を基に、現代社会の諸問題を文化・自然・人間生活と関連付けて理解できる。
- (2) 言語・情報・科学リテラシーに関する授業科目を履修・修得し、日本語と英語を用いたコミュニケーション・スキルを身に付け、情報通信技術（ICT）などを用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- (3) 学校教育のしくみ、児童・生徒のこころと発達、障害のある児童等への支援、教科内容、教育方法等について、幅広く体系的に知識と技能を身につけている。

2. 課題発見・解決能力

- (1) 実践演習型学習や問題解決型学習を通して、いじめ、不登校、理数離れなど、複雑化している現代の学校教育の諸問題について関心・理解を持ち、それらの問題をその社会・歴史的背景や原因、その心理的要因を含めて多面的に考察して、解決に必要な情報を収集し分析することができる。
- (2) 教育実習等による授業・指導の実践経験を経て、学校教育や各教科の教育における課題を発見し、選修の専門分野の基礎的な知識と技法を応用してその課題の解決に取り組むことができる。
- (3) 種々の教育実践経験を通して、学校教育の諸問題の解決のために他の教員と協調して行動し、子どもたちに対する指導力などを身に付け、実践できる。

3. 学校教育を担う社会人としての資質

- (1) 学校教育における様々な問題に積極的に関心を持ち、目標を持って主体的に学習する習慣を身につけている。また、学校教育の諸問題に的確に対応できるように、継続的に自己研鑽に励む意欲と態度を有する。
- (2) 高い倫理観と豊かな人間性を育み、学校教員としての責務を自覚して自己の能力を社会に還元する強い志を有し、社会人としての規範に従って行動できる。

（出典：文化教育学部資料）

資料 17 「教育課程編成・実施の方針」の例

【教育課程編成・実施の方針】(学校教育学課程)

教育方針を具現化するために、以下の方針の下に教育課程を編成し、教育を実施する。

1. 教育課程の編成

(1) 効果的な学習成果を上げるために、教養教育科目と専門教育科目を順次的・体系的に配置した4年一貫の教育課程を編成する。

(2) 教養教育については、以下の科目を配置する。

○ 基礎的な知識と技能の分野

① 教養教育科目において、言語に関する授業科目(外国語科目)、健康・スポーツ科目、情報リテラシー科目、文化・自然科学と技術・現代社会に関する授業科目(基本教養科目)を必修および選択必修として幅広く履修できるように配置する。

② 教養教育における言語・情報・科学リテラシーに関する教育科目は初年次から開講し、基礎的な汎用技能を修得した上で、専門課程における応用へと発展的させられる。

○ 課題発見・解決能力の分野高等学校と大学の接続を図るため授業科目(大学入門科目I)と現代的な課題を発見・探求し、問題解決につながる協調性と指導力を身につけるための科目を選択して学ぶ(基本教養科目, インターフェース科目)。

○ 地域や国際社会を担う国際的教養人としての資質(社会と個人の持続的発展を支える力)教養教育において、他者を理解し共生する力や高い倫理観・社会的責任感に関する授業科目を、選択必修として幅広く履修できるように配置する(基本教養科目, インターフェース科目)。

(3) 教員として必要とされる体系的な知識を修得するための専門教育科目を、以下の「専門基礎科目」「専門科目(課程共通科目、学校教育科目、専門外国語科目、選修科目、自由選択科目、卒業研究)」に区分し、1~4年次まで段階的に配置する。

1) 専門基礎科目

文化と教育の融合を図るという文化教育学部の理念を実現するための科目であるとともに、専門分野を学修する上で、その基礎になる科目として設置されている。そのため、本学部全員にとって必修および選択必修の科目としている。

2) 専門科目

課程共通科目、学校教育科目、専門外国語科目、選修科目、自由選択科目及び卒業研究から構成されている。

◇ 課程共通科目 各課程の趣旨・特色を活かすため、所属する課程の学生が専門の素養として共通にもっておくべき学力を育てるための科目として設置されている。そのため、各課程に履修すべき科目が定められていて、所属する課程の学生全員が履修する。

◇ 学校教育科目 学校教育課程の学生が、必修として履修しなければならない科目として設置している。各課程の目的に合った教育的素養を育てる。

◇ 専門外国語科目 全課程の学生にとって必修の科目で、外国語の運用能力を育てる。

◇ 選修科目 各選修の特色を表す科目であり、その選修分野の主体をなす科目として設定している。必修科目と選択科目からなっており、選択科目は、めざす能力を高めるために各自で計画的に選択する。

◇ 自由選択科目 全学部の専門教育科目の中から各自の興味にしたがって選択できる科目として設定している。そのため、この自由選択科目に配当された単位数は、教員免許取得のための科目を履修する際に利用する。

◇ 卒業研究 4年間にわたる学修の集大成にあたるもので、4年次の1年間を通して研究するために設定している。この卒業研究は、履修条件が課せられており、この条件を満たした者は、所定の手続きにより、3年次の後半にテーマと指導教員を決め、このテーマに基づいて計画的に卒業研究(論文、制作、演奏など)を進める。

2. 教育の実施体制

(1) 授業科目の教育内容ごとに、その分野の授業を行うのに適した専門性を有する教員が講義・実習等を担当するよう担当教員を配置する。

(2) 順序だてて体系的な知識や理論、技術を学べるように、授業科目の学年配置を工夫するとともに、教員の間で相互に連携して担当科目間の一貫性を保つ。

3. 教育・指導の方法

(1) 講義、実験・実技・実習およびフィールドワークによる実証的学習や体験学習とをバランスよく組み合わせて学習成果を高める。

(2) 学生の自主的な学習と問題解決法の習得を目指して、ディスカッションやプレゼンテーションなど取り入れた授業を積極的に行う。

(3) 少人数の学生グループごとに指導教員(チューター)を配置し、きめ細かな履修指導や学習支援を行う。

(4) 初年次より学校体験を取り入れ、体系的に指導する科目(教育実践フィールド演習I II III)を導入し、教員としての資質向上を促進する。

4. 成績の評価

(1) 各授業科目について、その内容、到達目標、成績の評価方法と基準をシラバス等で公開して学生に周知した上で、「成績判定に関する規定」に基づき公正で厳格な成績評価を行う。

(2) 必修科目である卒業研究については、成績評価の公正性を担保するために主査の他に副査を置く。主査と副査は上記規定に則り合議により厳格な判定を行う。

(出典：文化教育学部資料)

資料 18 カリキュラムマップ

表 学校教育課程における教育目標を達成するための授業科目の流れ(カリキュラムマップ)

学位授与の方針	授 業 科 目 名								
	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年前期	4年後期	
1	(1)	基本教養科目(自然科学と技術、文化、現代社会の分野)							
		健康・スポーツ科目	健康・スポーツ科目						
	(2)	外国語科目(英語A)	外国語科目(英語B)	外国語科目(英語C)	外国語科目(英語D)				
		情報リテラシー科目	情報リテラシー科目						
		専門基礎科目(実践英語)	専門基礎科目(実践英語)						
		専門基礎科目	専門基礎科目	専門基礎科目					
	(3)		課程共通科目	課程共通科目	課程共通科目				
			専門基礎科目	専門基礎科目	専門基礎科目				
			学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	
			(教育実践フィールド演習Ⅰ)		(教育実践フィールド演習Ⅱ)	(教育実践フィールド演習Ⅲ)			(教職実践演習)
						(教育実習)			
			選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)
2	(1)	大学入門科目I							
	(2)	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目		
		選修科目(必修)	選修科目(必修)	選修科目(必修)	選修科目(必修)	選修科目(必修)	選修科目(必修)		
		選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	
								卒業研究	
	(3)	大学入門科目I		インターフェース科目	インターフェース科目	インターフェース科目	インターフェース科目		
		学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目		
					(教育実践フィールド演習Ⅱ)	(教育実践フィールド演習Ⅲ)			
						(教育実習)			
	選修科目(必修)	選修科目(必修)	選修科目(必修)	選修科目(必修)	選修科目(必修)	選修科目(必修)			
	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)	選修科目(選択)		
3	(1)			インターフェース科目	インターフェース科目	インターフェース科目	インターフェース科目		
		自由選択科目	自由選択科目	自由選択科目	自由選択科目	自由選択科目	自由選択科目	自由選択科目	
								卒業研究	
	(2)			インターフェース科目	インターフェース科目	インターフェース科目	インターフェース科目		
		学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	学校教育科目	(教職実践演習)	
標準修得単位数	21	21	23	23	22	22	4	4	

(出典：文化教育学部資料)

1-2-2 社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫

実践力を強化するために次のような科目の新設・改善を行った。

(1) 教育実習の高度化

「小学校教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を平成21年度入学生より「教育実践フィールド演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」として再編した。演習科目として本学部教員がより主体的に指導し、本学部での学びと実習校での実践をより有機的に結びつけた。

(2) 教職実践演習

平成23年度から希望者に単位認定なしに試行していた「教職実践演習」を、平成25年度から必修科目として実施している。その際、予習復習に役立つテキストの作成を行った。模擬授業、附属学校での演習など実践的側面を特に重視している。

(3) インターフェース科目

本科目は平成 25 年度から導入した教養教育科目である。現代社会における課題を発見し解決に向けて取り組む姿勢を通して、知識活用力・実践力の養成を目指している。各プログラムは（資料 19）にある通りである。

資料 19 インターフェース科目の内容

環境コース	環境・資源・エネルギー等に関する現代的課題を理解し、市民社会の一員として環境問題の解決に主体的に取り組むことのできる知識と応用力を養うことを目的とする。
文化と共生コース	グローバル化する現代社会において、異文化への高い理解力と異文化間コミュニケーション能力を育成する。
生活と科学コース	人間と科学技術との関係を見つめ直すことにより、科学を基盤とした社会の持続的発展を思考し、リスクに対応できる安全な社会・生活の構築を支えることができる人材を育成する。
医療福祉と社会コース	医学・看護学の専門科目履修の準備段階として、また教員を目指す学生を対象に、医学・看護学・教育・福祉と社会の関わりを考える。
地域・佐賀学コース	生活する上で地域との関わりは不可欠であるが、生活と地域との関係を社会・文化・経済の面から理解することを目的とする。

（出典：文化教育学部資料）

1-2-3 国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

(1) 全学統一英語能力テスト

1・2年次に「全学統一英語能力テスト(TOEIC)」を学部全学生に課し、その結果による習熟度別クラス編成を行っており、次表の学部全体の平均点にみられるように効果が現れている。特に英語への意欲の高い学生が多い国際文化課程ではその効果が顕著である。

資料 20 全学統一英語能力テスト TOEIC 比較表

課程名	平成 26 年度 全学統一英語能力テスト (平成 25 年度入学者)		平成 27 年度 全学統一英語能力テスト (平成 26 年度入学者)	
	平均点 (1 回目)	平均点 (2 回目)	平均点 (1 回目)	平均点 (2 回目)
文化教育学部	384.4	393.4	386.4	390.0
学校教育課程	377.8	394.0	378.6	382.3
国際文化課程	490.4	508.5	459.8	480.8
人間環境課程	317.8	301.4	343.7	316.5
美術・工芸課程	340.5	342.7	351.4	363.1

（出典：文化教育学部資料）

(2) 専門教育外国語

各課程・選修に応じた専門的知識を外国語により修得させるために「専門教育外国語」2 単位を設定している。

1-2-4 国際化のための教育課程の編成・実施上の工夫

(1) 留学支援英語教育カリキュラム

教養教育に平成 25 年度から「留学支援英語教育カリキュラム」を置き、留学のための 3 年制の体系的な英語教育を行っている。

資料 21 40 人クラス「留学支援英語教育カリキュラム」への本学部の履修者数（中途辞退者を含む）

年度	参加者数（人）
平成 25 年度	16
平成 26 年度	11
平成 27 年度	14

（出典：文化教育学部資料）

(2) 国際交流実習

教養教育科目に「国際交流実習」を置き、数週間程度の海外実習を行っている。

(3) 海外実習

国際文化課程欧米文化選修では、専門科目「海外実習」を置き、「ドイツ語とドイツ文化のための研修旅行」プログラム等を実施している。

資料 22 「ドイツ研修旅行」の参加者数

年度	参加者数（人）
平成 22 年度	1
平成 23 年度	2
平成 24 年度	6
平成 25 年度	6
平成 26 年度	0
平成 27 年度	3

（出典：文化教育学部資料）

(4) ツイニングプログラム

平成 23 年度にハノイ国家大学外国語大学とツイニングプログラム転入学制度に関わる協定を結び規定等の整備を行なった。これをもとに平成 24 年度 4 人、平成 25 年度 2 人、平成 26 年度 3 人、平成 27 年度 3 人を学部 3 年次転入学生として受け入れてきた。

(5) SPACE-E, SPACE-J

外国人留学生のための佐賀大学短期留学プログラムとして置かれている SPACE-E（英語の授業による学部学生用コース）および SPACE-J（日本語の授業による学部と研究科学生用のコース）に入学した多数の留学生の受け入れ教員を本学部教員が務めている。

以上の種々の試みの結果，第2期における派遣留学生の数は，初年度と最終年度を比較すると，大きく伸びている（資料23）。

資料23 派遣留学生数

年度	参加者数（人）
平成22年度	15
平成23年度	36
平成24年度	65
平成25年度	56
平成26年度	51
平成27年度	82

1-2-5 養成しようとする人材像に応じた教育プロジェクト

理論と実習の一体化による教育効果を狙った次のようなプロジェクトを実施した。

(1) 「子どもの発達支援」科目

文部科学省特別経費「発達障害・不登校及び子育て支援に関する医学・教育学クロスカリキュラムの開発」（平成22年度～24年度）の一環として文化教育学部が中心となって実施した。発達障害・不登校・子育て支援に関する医療，教育，心理，福祉の内容を1つのプログラムとして体系化し実施した。平成22～24年度のコア4科目ののべ受講生総数は約2,500人であった。

資料24 「子どもの発達と支援プログラム」の科目構成

科目名	授業形態	学期	時間数
1. コア科目（4科目）			
子どもの支援（発達障害・心身症と小児医療）	講義	前	24
子どもの支援（発達障害と不登校への心理・教育支援）	講義	後	24
子どもの支援（児童福祉施設の目的と役割）	講義	前	24
子どもの支援（家族支援と子育てスキル）	講義	後	24
2. 選択科目（2科目）			
発達障害等事例研究	講義/演習	前	24
心の科学（発達障害と神経心理学）	講義	後	24
心の科学（心の個人差）	講義	後	24
心の発達（心の発達過程）	講義	前	24
心身の病（心身の障害）	講義	前	24
心身の病（心の病と癒しのプロセス）	講義	後	24
教育の実際（学習障害と授業）	講義	前	24
子どもの病気（子どもの病気と子育て）	講義	後	24

（出典：文化教育学部資料）

(2) 臨床教育実習

臨床教育実習とは，発達障害や心身症等の児童生徒を対象とする教育実習のことである。これも上記プロジェクト「医学・教育学クロスカリキュラムの開発」の一環として行った。

(3) 文化創成コーディネート・プログラム

概算要求特別経費事業として平成 23～25 年度にかけて実施した。学外実習を通して、社会で活躍できる企画力を備えた人材を育成することを目指した地域と大学を結ぶインターフェース型教育プログラムである。特色ある新規科目として、下の表のものが挙げられる。

資料 25 文化創成コーディネート・プログラム 特色ある科目と履修者数

種別	開講科目	H23	H24	H25
基礎科目 (必修)	文化創成コーディネート論	12	30	14
実習科目 (選択必修)	文化イベントプロデュース実習 I	—	5	20
	文化イベントプロデュース実習 II	—	5	17

(出典：文化教育学部資料)

資料 26 文化創成コーディネート論 (平成 23 年度)

授業計画

第 1 回：オリエンテーション
 第 2～3 回：コーディネート基本論
 第 4～5 回：構成論 (学生によるテーマの設定)
 第 6～7 回：組織編成論 (プロデュースのための組織編成)
 第 8～11 回：プロデュース論とビジネスエスノグラフィー
 第 12～14 回：編集論
 第 15 回：プレゼンテーション
 第 16 回：授業のまとめと評価

(出典：文化教育学部資料)

(4) ヘルスプロモーション教育及びウルトラマンクラブ

「地域の高齢者及び子どものヘルスプロモーション促進に向けた学生の実践力養成プロジェクト」として「ヘルスプロモーション実習」の実習授業を実施している。各週 400 人近い地域住民が参加する中高年齢向け健康教室の指導や運営に学生が関わっている。

また、発達障害のある子どもたちの運動教室である「ウルトラマンクラブ」を実施し学生トレーナー 10 人程度が参加している。

1-2-6 養成しようとする人材像に応じた効果的な教育の工夫

実践力を養うため次のような教育上の工夫を行ってきた。

(1) ICT 教育

佐賀県では ICT 教育を積極的に推進していることを受け、本学部でも電子黒板の使い方の講習会を開き、「教育実践フィールド演習」で活用している。また、佐賀県との共同事業「ICTを活用した学びの推進プロジェクト」の一環として、「教育実践演習」における電子黒板を用いた学生の模擬授業に対して、教育委員会職員から実践的アドバイスを受けている。

(2) 佐賀大学美術館と連携した教育の改善

- ・学芸員資格取得に関して、平成 25 年度開設の佐賀大学美術館を用いることでより実践的な「学内実習」が可能となった。平成 25 年度には 58 人の受講者があった。
- ・学生が卒業制作展等（資料 27）において、佐賀大学美術館を活用し、より主体的に作品展示手法を学び、工夫している。

資料 27 佐賀大学美術館における展示

展覧会名	開催年月
美術・工芸課程 第 55 回総合展	平成 25 年 11 月
美術・工芸課程 第 58 回卒業制作展	平成 26 年 2 月
教科教育選修国語（書写）分野 第 15 回卒業制作展	平成 26 年 3 月
美術・工芸課程西洋画専攻 第 5 回 「A DOMANI」展	平成 26 年 5 月
「九州地区大学美術科 8 BOXes」展	平成 26 年 6 月
「デッサンの前と後ろー美術・工芸講座の授業風景」展	平成 26 年 7 月
美術・工芸課程 第 56 回総合展	平成 26 年 11 月
美術・工芸課程 第 59 回卒業制作展	平成 27 年 2 月
教科教育選修国語（書写）分野 第 16 回卒業制作展	平成 27 年 3 月
美術・工芸課程西洋画専攻 第 6 回 「A DOMANI」展	平成 27 年 5 月
美術・工芸課程 第 57 回総合展	平成 27 年 11 月
教科教育選修国語（書写）分野 第 17 回卒業制作展	平成 28 年 2 月
美術・工芸課程 第 60 回卒業制作展	平成 28 年 2 月

(出典：文化教育学部資料)

1-2-7 主体的な学習を促す取組

L P を活用してチューターが学習状況に応じた指導を行うことにより、主体的な学習を促すとともに、次表のような工夫を行っている。

資料 28 課程毎の主体的な学習を促す取組

課程	代表的な取組
学校教育課程	「教育実践フィールド演習Ⅲ」ではあらかじめ大学で 1 単元の学習指導計画をたて指導案を作成し、その後実習校でそれに基づき授業を行うという、より学生の主体性の高い教育実習を行っている。
国際文化課程	「文化創成コーディネート・プログラム」では、「文化創成コーディネート論」で文化創成の学問的基礎を学ばせただけで、「文化イベントプロデュース実習Ⅰ・Ⅱ」で、学外におけるイベントの企画から実行までを学生に委ねるといふ、学生の主体性を活かした授業展開を行った。
人間環境課程	人間環境課程の健康福祉・スポーツ選修の科目である「健康福祉スポーツボランティア」では自分で興味・関心のある健康福祉・スポーツに関するボランティア活動を行わせている。最初は講義を通してボランティアについて学ぶが、その後、学生自らボランティアについて学び、自分でボランティア先を見つけて交渉し、実際にボランティア活動をした上で、レポートを作成させている。
美術・工芸課程	平成 21 年度入学生より、「美術工芸学外実践活動」を行っている。例えば、佐賀市内の総合病院にある緩和ケア病棟で、絵画や陶芸などの活動が行われる際に、補助ボランティアとして学生が参加し、患者の創作活動を支援するといった活動である。（ボランティアを行う団体との交渉や、連絡調整は教員が行っている。）特に、緩和ケアボランティアでは、「生きる」ということに対する意識が大きく変わったという学生もおり、双方にとって意義のある取り組みになっている。

(出典：文化教育学部資料)

その他、各棟に無線LANを導入して、ノートパソコンによる自主的な学習を促す環境を整備している。また、美術、音楽、体育などの実技系科目では施設等の利用において学生の便宜を図ることにより自主的な学習を促している。

1-2-8 その他の学習支援

教員採用試験対策プロジェクト

平成23年度から各種プログラムを一元化した「教員採用試験対策プロジェクト」を実施している。教員採用試験対策であるとともに模擬授業、英会話、体育実技、ピアノ実技の個人指導など小学校教員としての能力の向上にも有効であると思われる。

(水準)

教育内容・方法は「期待される水準にある」と判断できる。

(判断理由)

- ・教育課程編成の体系性を学生に明示するために「学位授与の方針」や「教育課程編成・実施の方針」を明確化し、「学士力と科目との対応表」、「カリキュラムマップ」を作成した。
 - ・より実践力をもつ教員を養成するために、教育実習の高度化、教職実践演習の導入、「子どもの発達支援」科目の実施、臨床教育実習の継続実施、ICT教育の推進等に取り組んできた。
 - ・地域を活性化させうる、実践力をもつ人材を育成するために「インターフェース」科目、文化創成コーディネート・プログラム、ヘルスプロモーション教育など新たな試みを実施している。
 - ・「ハノイ国家大学外国語大学とのツイニングプログラム転入学制度」や「国際交流実習」、「海外実習（ドイツ研修旅行）」など国際化教育の質の充実に努めてきた。また、「TOEIC-IP」の実施や、「専門教育外国語」開講によって学生の英語力向上にも努めてきた。
- これらのことから、想定する関係者の期待に応えている。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 2-1 学業の成果

(観点に係る状況)

2-1-1 卒業状況

平成24年度入学生の標準修業年限4年での卒業率は、学校教育課程が85%、国際文化課程が75%（海外留学者が率の低下に影響している）、人間環境課程が86%、美術・工芸課程が83%、学部全体では83%であった。概ね学生は着実に単位を取得し卒業していると判断できる。

2-1-2 資格取得状況

本学部学生の教員免許状取得状況は（資料29）のとおりである。学校教育課程の多くの学生は卒業要件である小学校教諭の免許だけでなく、他の免許も取得していることがわかる。

また、社会福祉士国家試験については（資料30）のとおりである。難易度が高く合格率が高くない年も多いが全国平均をかなり上回っている。

さらに、学芸員資格を取得した者は、平成22年度28人、23・24年度各16人、25年度8人を数える。

資格取得状況はまずまず良好で学習成果が現れているといえる。

資料29 平成27年度卒業生の課程別教員免許取得状況

	小学校 教諭免	中学校 教諭免	高等学校 教諭免	特別支援 学校教諭免	幼稚園 教諭免	合計
学校教育課程	89	46	43	30	19	227
国際文化課程	0	11	14	0	0	25
人間環境課程	4	16	19	0	0	39
美術・工芸課程	0	15	14	0	0	29
合計	93	88	90	30	19	320

(出典：文化教育学部資料)

資料30 平成22～27年度における社会福祉士国家試験の合格状況

年度	受験者数	合格者数	合格率	全国平均合格率
平成22年度	10	4	40.0%	28.1%
平成23年度	5	2	40.0%	26.3%
平成24年度	5	2	40.0%	18.8%
平成25年度	7	3	42.9%	27.5%
平成26年度	3	2	66.7%	27.0%
平成27年度	1	1	100.0%	26.2%

(出典：文化教育学部資料)

2-1-3 学生を受けた賞等の状況

平成 23～27 年度の九州・全国レベルの賞の実績は（資料 31）のとおりである。極めて高い成果を挙げていることがわかる。

資料 31 平成 23～27 年度文化教育学部の受賞・表彰等

年 度	大会やコンクール等の名称 (全国・西日本・九州)	受賞等の内容
平成 23 年度	第 33 回全国国公立大学空手道選手権大会 (女子個人の部)	優勝
	第 11 回佐藤太清賞公募美術展	大賞
	第 35 回九州青年美術公募展	最高賞
	第 41 回日本彫刻会展	入選
	社会人基礎カグランプリ 2011	九州・沖縄地区奨励賞
平成 24 年度	第 16 回 PIARA ピアノコンクール全国大会	第 2 位
	第 12 回佐藤太清賞公募美術展	大賞
	第 12 回佐藤太清賞公募美術展	特選
	第 42 回日本彫刻会展	入選
	第 44 回日本美術展覧会 第 3 科 (彫刻)	入選
平成 25 年度	第 8 回世界絵画大賞	中里賞
	第 43 回日本彫刻会展	入選
	第 34 回九州新工芸展	大賞
	第 1 回ホキ美術館大賞展	入選
	第 65 回毎日書道展 (大字書の部 U23)	毎日賞 (全国公募最高賞)
平成 27 年度	第 92 回白日会展	白日賞・オンワードギャ ラリー賞
	第 15 回佐藤太清賞公募美術展	入選

※ 佐賀県レベルの入選・受賞等は多数のため省略
(出典：文化教育学部資料)

2-1-4 卒業研究の状況

卒業研究では今日的・社会的な課題に取り組んでいる（資料 32）。各課程での学びを基礎として、より発展的・専門的考察がなされており、大学での学業の集大成として十分な成果を上げていると判断できる。

資料 32 平成 27 年度卒業研究

学校教育課程
<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児虐待が及ぼす発達障害と支援の在り方に関する研究 ・ 子どもの生きる力と生活体験に関する研究 ・ 生きづらさを感じる人たちの居場所はどこにあるのか ・ 毛筆書写が嫌いな児童への支援 ・ 佐賀県における国語科地域教材の研究 ・ 国語教育における電子黒板の利活用 ・ 理科教育における ICT 教育に関する研究 ・ 小学校外国語活動における読み聞かせ活動の試み ・ 特別支援学級の体育学習に関する研究

・教師と児童生徒の相互作用を支えるICT活用の研究
人間環境課程
<ul style="list-style-type: none"> ・高校生の自転車利用に関する安全意識・行動と安全教育の効果について ・スポーツ選手の心理的競技能力の特徴～高等学校の運動部生徒を対象として～ ・高齢者の住環境に関する研究 ・健康教室における参加者の健康意識に関する研究 ・3か月の健康教室が中高齢者の身体に及ぼす効果 ・認知症予防に効果のあるアレンジ可能なリズムダンスの開発 ・子どもの貧困の現状と対策:コミュニティソーシャルワークの視点から ・佐賀県在住の児童生徒における身体活動状況とメンタルヘルスの関係性 ・特別支援学級の体育学習に関する研究 ・児童の体力向上と教員の資質能力に関する研究

(出典:文化教育学部資料)

2-1-5 学業の満足度

平成 25・26 年度の専門科目に対する学生の満足度を示す(資料 33)。8割強の学生がほぼ授業に満足している。

資料 33 専門科目の満足度(質問項目:D-1「この授業を受講して満足が得られた」)

	平成 25 年度 前期	平成 25 年度 後期	平成 26 年度 前期	平成 26 年度 後期
該当しない・わからない	0.50%	1.01%	0.35%	0.18%
全くそうは思わない	1.37%	1.58%	1.67%	2.06%
そうは思わない	3.21%	3.02%	3.87%	2.47%
どちらともいえない	12.56%	12.54%	11.83%	11.06%
そう思う	45.66%	49.15%	48.02%	46.53%
全くその通りだと思う	36.69%	32.70%	34.27%	37.71%

(出典:文化教育学部資料)

(水準)

学業の成果は「期待される水準にある」と判断できる。

(判断理由)

- ・教員免許・学芸員資格取得状況, 社会福祉士国家試験合格状況などおおむね良好である。
 - ・美術・音楽・書道等においては全国レベルの賞を受賞しており, 傑出した成果を挙げている。
 - ・8割強の学生がほぼ授業に満足し4年で卒業している。概ね学生はまじめに学業に取り組み卒業していると判断できる。
 - ・卒業研究においては今日的課題に取り組んでおり, 教員としての資質向上, 地域活性化のためのスキルの涵養等に資するものとして成果が上がっていると判断できる。
- これらのことから, 想定する関係者の期待に込めている。

観点 2-2 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

2-2-1 就職状況

平成 27 年度の本学部の就職率は全体で 97.6%である。職業別就職状況を(資料 34)に示す。

資料 34 平成 27 年度職業別就職状況

	学校 教育	国際 文化	人間 環境	美術・ 工芸
小学校教員	29	0	0	0
中学校教員	6	5	2	2
高等学校教員	0	2	1	0
幼稚園教員	3	0	1	0
特別支援学校	6	1	1	2
その他技術者(非開発)	0	0	1	0
農業・水産技術者	0	0	1	0
建築・土木・測量技術者	0	1	0	0
情報処理・通信技術者	2	4	2	0
その他技術者	0	1	0	0
美術・写真・デザイナー・音楽・舞台	0	0	0	5
その他専門的職業	3	4	3	2
事務従事者	9	27	37	3
販売従事者	2	5	10	2
サービス職業	2	8	4	1
輸送・機械運転従事者	0	0	1	0
合計	62	58	64	17

(出典：文化教育学部資料)

2-2-2 教員採用試験合格の状況

佐賀県小学校教員採用試験について、二次試験合格数は(資料 35)のとおり増加しており、個別の試験結果についても(資料 36)に示すとおり英会話等の成績が上昇した。

(資料 37)に示されるとおり平成 16~21 年度までの 6 年間よりも増加している。とりわけ、平成 25 年度には、教員就職率(正規+臨時)は九州の国立大学教員養成課程の中で第 1 位となった。学習の成果が現れているといえる。

資料 35 本学部卒業見込み者の合格者数及び合格率(佐賀県小学校)

年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度
一次試験受験者数	28	28	38	29
二次試験合格者数	3	10	18	20
合格率	11%	36%	47%	69%
合格者全体に占める率	5%(3/60)	12%(10/84)	20%(18/92)	20%(20/102)

(出典：「教員採用試験結果に係る佐賀県教育委員会と佐賀大学文化教育学部との情報交換会」平成 25 年及び 26 年資料)

資料 36 二次試験得点比較：英会話（佐賀県小学校）

年度	24年度	25年度	26年度	27年度
受験者全体の得点	7.4	7.1	7.4	7.3
本学部卒業見込み者の得点	6.8	7.6	8.1	8.5

(出典：文化教育学部資料)

資料 37 文化教育学部卒業生の教職員正規採用人数の推移

	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
教職員正規採用人数	(8) 10	(20) 20	(20) 21	(18) 22	(23) 28	(19) 23	(32) 35	(25) 31	(22) 25	(30) 32	(27) 33	(35) 42

※上段カッコ書きは、学校教育課程
(出典：文化教育学部資料)

2-2-3 関係者からの評価

過去4年間に本学部卒業生が在籍していた佐賀県内の小・中・高等学校及び企業に対しアンケートを実施した。(資料38)に示すとおり、平均的に良好な評価を得ている。

「授業に関する能力」等が第1期と比べて向上しているのは実践的な科目を導入した成果と推察される。

資料 38 アンケート調査

佐賀県小・中・高等学校対象アンケート						
佐賀県教育委員会による在籍者データに基づき、佐賀県内の小・中・高等学校に対しアンケートを実施した。						
アンケート用紙送付数 112校, 対象卒業生数：77人						
(内 訳)						
小学校 62校 (正規職員 46校、臨時的任用 16校)						
中学校 28校 (正規職員 13校、臨時的任用 15校)						
高等学校 32校 (正規職員 12校、臨時的任用 20校)						
在籍を前提に回答のあった学校数 45校 (70件)						
(1校に複数の教員が在籍している場合は、延べ回答数をかっこ書きで表示)						
小学校 28校 (37件)						
中学校 9校 (13件)						
高等学校 8校 (20件)						
(企画・評価委員会により平成26年11月～12月にかけて実施)						
過去4年間に採用された卒業生に対する評価。5段階評価の平均点 (1：非常に優れている、2：優れている、3：やや劣っている、4：劣っている、のうちから1つを選択。)						
学校種	事項	小学校	中学校	高等学校、 特別支援学校	平均	
					第二期	第一期 (参考)
	1. 基礎的な能力 (事務的能力等も含む)	1.89	2.31	2.20	1.91	2.19
	2. 授業に関する能力	2.08	2.15	2.05	2.09	2.26
	3. 学級経営に関する能力	2.14	1.90	2.16	2.11	2.44

4. 生徒指導に関する能力	2.24	1.46	2.00	2.03	2.48
5. 生徒とのコミュニケーション能力	2.24	2.00	2.20	2.19	2.17
6. 総合的	2.03	2.08	2.10	2.06	-

自由意見（今後の教員養成に資する意見を中心に記載）

- ・子どもに寄り添っていける心温かく、たくましい教師を育成して欲しい。
- ・やる気（前向きさ）と協調性のある教員養成に力を入れて欲しい。
- ・異年代とのコミュニケーション能力の向上（保護者対応）、学級経営、特別活動、体育
- ・個人主義（組織としての自覚が乏しくなっている）の傾向の先生が多い。
- ・即、実践力として活躍できる教師
- ・教師という仕事に生きがいを持っている元気あふれる教師
- ・子どもをほめる視点を多く持っていること
- ・他職員とのコミュニケーションをとること
- ・特別支援に関する能力
- ・保護者に対する能力
- ・生活指導や保護者対応の事例研究、言語活動を取り入れた学習指導法の習得など
- ・知識だけでなく、それを臨機応変に使える力

文化教育学部卒業生の就職先関係者アンケート

アンケート用紙送付数：約 100 企業/回答のあった企業数：34 社（回収率：約 34%）/対象卒業生数：38 人（就職委員会により平成 27 年 2 月実施）

卒業生への評価 4 段階評価の平均点（1：非常に満足、2：満足、3：やや不満足、4：不満足、のうち 1 つを選択。6 は、1：積極的に採用、2：採用、3：検討中、4：消極的、のうちから選択。）

1. 基礎知識・能力	1.95
2. 実務能力	1.94
3. 外国語能力	2.51
4. 職場環境への適応	1.93
5. 会社への貢献	1.93
6. 今後の採用予定	1.72

自由意見

- ・今後のキャリアアップが楽しみな人材である。
- ・積極的に自らコミュニケーションをとる姿勢を磨いてほしい。
- ・期待度合いからすると若干物足りない。今後のキャリアアップに期待している。
- ・本当に素晴らしい卒業生です。機会があればまたよろしくお願いします。
- ・学業中心の色が強く社会性に乏しい面はありますが、一步一步前進され総合的に頑張っておられます。
- ・積極的に仕事に取り組んでいる（N 大学病院）
- ・地域おこし協力隊として活動中（大分県 T 市役所）
- ・佐賀出身で佐賀を好きな人を求めています。
- ・当社で採用した子はとてもデザイン力とセンスがあり優秀で努力家です。今後も優秀な人材の輩出をお願いします。

（出典：文化教育学部資料）

（水準）

進路・就職の状況は「期待される水準にある」と判断できる。

（判断理由）

- ・全体的に高い就職率を維持しており、十分な人材輩出機能を有している。教員採用については、近隣の国立大学に比して高い正規就職率を達成している。
- ・アンケート調査では本学部卒業生は概ね良好な評価を得ている。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

分析項目Ⅰ 教育活動の状況

(1) 質の高い教員の養成のための取組

第2期中期目標期間において次のような取組を新規実施あるいは本格実施した。

- ・「教職カルテ」の導入(1-1-5(5))
- ・教育実習の高度化(1-2-2(1))
- ・「教職実践演習」の導入(1-2-2(2))
- ・「子どもの発達支援」科目の実施(1-2-5(1))
- ・ICT教育に関する取組(1-2-6(1))

これらはより高い実践力を持つ教員の養成に寄与していることから質が向上していると判断できる。

(2) 教育体制の充実

第2期中期目標期間において次のような取組を新規実施した。

- ・TP(1-1-4(2))
- ・シラバス点検(1-1-5(1))
- ・CAP制度(1-1-5(2))
- ・LP(1-1-5(4))

これらの取組により第1期中期目標期間よりも教育体制が充実したことで質保証の体制がより強化されたと判断できる。

(3) 国際化教育の質の充実

1-2-4のとおり「ハノイ国家大学外国語大学とのツイニングプログラム転入学制度」や「国際交流実習」、「海外実習」など国際化教育の質の充実に努めてきた。

その結果、短期留学まで含めた留学生の派遣数は、第2期中期目標期間において増加傾向にあり、また、第1期中期目標期間よりも大きく伸びていることから国際化教育の質の充実が図られたと判断できる。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

第1期中期目標期間において学校教育課程卒業生の正規教員採用数が115人であり、第2期中期目標期間は171人となり約1.5倍増となった。また、アンケート調査(資料38)にみられるように卒業生は概ね高い評価を受けており、「数」のみならず「質」の面でも実績を挙げていると言える。

以上のことから、教育成果が現れていると判断できる。